

第10回8020童話賞

一般の部 「童話大賞」作品

「かかしのゴンベエ」

タヤけが里を赤くてらし、少し冷えた風が田んぼの稲穂をゆらしていた。

田んぼには、かかしが立っていた。里で一人ぐらしをしているおじいさんが作り、ゴンベエと呼んでいた。

体は竹とわらに布を巻いてできている。ほころびた笠をかぶり、へのへのもへじの顔、かすりの着物を着て、首から手ぬぐいをぶらさげている。竹の両うでは横へまっすへのび、手には炭で指がかいてあった。

かかしのゴンベエは落ち着かなかった。タバから、へのへのもへじの、への字の口がへんだ。

うーん。何か口の中がざわざわする。

ざわざわ、ざわざわ、ざわざわ。
ぱくく。

炭でかいたゴンベエの口があいた。

「あれまあ」

と言って、ゴンベエはあわてて手で口をおさえた。口はきけるし、手も動く。ために足に力を入れたら、竹の一本足がペキリと二つにわれて歩くことができる。

一わのカラスが、カアカアとなきながらゴンベエの肩にとまった。

「これはめずらしい。かかしが歩いている。」

「うるさいぞ、こいつ。」

ゴンベエは、手でカラスをはらった。

「おどろいた。しゃべったぞ。」

カラスは、稲穂にぶちあたりながら目をまわくした。ゴンベエは、歩きなれていないせいか、ふらついて田んぼにころがってしまった。

「いてててて。しりもいたいが、口の中もい

たい。」

とゴンベエは言った。カラスはゴンベエの頭にとまった。

「おまえ、口をあけてみる。」

カラスに言われるままに、ゴンベエは口をあけた。

「おまえ、歯があるな。ころんだひょうしに歯で口の中を切ったのだ。」

「歯ってなんだ。」

「食べ物をかみくだいたり、すりつぶしたりするものだ。」

そのとき、ゴンベエの腹が「ぐぐう」と、はでになった。

「おまえ、腹がへっているのか。」

「おまえじゃない。おいらはゴンベエだ。」

カラスは、ふふんと鼻をならして山の方へ飛んで行ってしまった。

ゴンベエは立ち上がり、手で腹をおさえた。腹がへった。

（おいらを作ってくれたおじいさんのところへ行けば、何か食べさせてもらえるだろうか。でも、かかしが話したり歩いたりしたら、おじいさんは腰をぬかすだろう。）

ゴンベエはあれこれ考えた。

すると、また、さっきのカラスが飛んできました。くちばしに柿をぶらさげている。

「食えよ、ゴンベエ。」

ゴンベエは、すぐに前歯で柿にかぶりついた。奥歯でくだけ、すりつぶし、のみこんだ。食べるってすごい。かむってすごい。

「ありがとう。ああ、うまかった。」

あたりは、すっかり暗くなり、ゴンベエとカラスは稲の間でねむった。

よく朝、ゴンベエは自分の腹のなる音で目がさめた。

「ゴンベエ、川へ行こう。魚をとって食おうや。」

カラスにさそわれ、ゴンベエは田んぼから少しはなれた川へ出かけた。

ゴンベエは竹の手を、「えいっ」と川の流

れに入れた。すると、炭でかいた指がポキポキと音をたててわれ、五本指になった。

「これならいいぞ。」

ゴンベエは、タベのお礼に魚をどっさりつかみとった。大きい魚を引き上げるときは、歯を食いしばって力をこめた。

「どんなもんだい。」

ゴンベエはたのしくてたまらなかった。

カラスは火をおこした。とった魚を焼いて、骨ごとバリバリと音をたてて腹いっぱい食べた。

次の日は、山に入り、木の実をポリポリ食べた。

また次の日は、しかけを作っているのししをつかまえ、肉を焼いて食いちぎって食べた。

次の日も次の日もカラスといっしょに野山をかけまわった。

おじいさんは、急にゴンベエのすがたが見えなくなったので、首をかしげていた。たおれているかもしれない、あるいは風に飛ばされたのかもしれないと田んぼの中をさがしまわった。

「ぬすまれてしまったのだらうか。」

でも、何のために。おじいさんにはわからなかった。

たくさんのすずめどもが、田んぼの上を飛びまわっている。おじいさんはため息をついた。

ある日、山でむかごを食べていると、ゴンベエはまた口の中がざわつくのを感じた。

「じゃり。じゃり。」

「あう。」
口をあけると、歯がぼろぼろとこぼれだした。

ぼろり。

最後の一本が地面に落ち、ゴンベエの歯はすっかりなくなってしまった。落ちた歯は、どれもところどころ黒くなっていた。

「ほひらによはぎゃ（おいらの歯が）。」
もう食べられない。かむことができない。

ゴンベエは、その場へたりこんでしまった。ゴンベエは、力なく山をくだり田んぼにもどった。

足をずぶりと土に差し、両うでを広げ、口をへの字にして立った。

（おいら、ばちがあたったんだ。おいらを作ってくれたおじいさんの恩をわすれて、田んぼの番をしなかったから。）

カラスは、ゴンベエの頭にとまり、うでを組んだ。どうしたものだろう。

「ゴンベエじゃないか。」

カラスがふりむくと、おじいさんが立っていた。

「どこに行っておったのだ。いや、かかしが歩くはずもない。だれぞにさらわれておったのか。まあよい。よくもどってくれたな。」

おじいさんは、ゴンベエの頭をやさしくなでた。ゴンベエはたまらなくなり、なみだがあふれた。

「おひいはん、ほいらは（おじいさん、おいらは）」

「わっ、ゴンベエが何か言っとるし、ないておる。」

おじいさんは腰をぬかすほどおどろいた。

ゴンベエは、おじいさんに、田んぼの番をせずに申しわけなかったこと、そのせいではちがあたり歯が黒くなってみんなぬけてしまったことを、ふにゃふにゃしながら正直に話した。

「なんだと、歯が黒くなってぬけてしまっただと。どれ口をあけて見せてごらん。」

おじいさんは、ものすくびっくりしたけれど、ゴンベエのすまないという気持ちが伝わってかわいそうになった。

ゴンベエが口をあけると、カラスもいっしょにのぞきこんだ。

おじいさんはにっこりとわらった。

「ゴンベエや、おじいさんの歯がはえてきておる。」

ぬけてしまったのはこどもの歯だ。はえ変わったのじゃ。こんどは黒くならないように、だいにしなればな。

カラスは、おじいさんとゴンベエの顔をかわるがわるいそがしく見て、うれしそうにカアカアとないた。

おじいさんは、ゴンベエのために小枝で歯ぶらしを作ってあげた。ゴンベエは、田んぼの番をし、おじいさんの家でおかゆを食べ、手作りの歯ぶらしで大切な歯をていねいにみがいた。

稲かりが終わって、田んぼの番もなくなっ
てからは、おじいさんの畑しごとを手伝った。
ときどき、カラスと山や川へ行ってはみやげ
をどっさり持ち帰り、おじいさんをよろこば
せた。

冬になるころには、歯はきれいにはえそろ
い、また元気にむしゃむしゃ食べている。も
ちろん虫歯は一本もない。
